森林・里山と文化

人と自然の共生

日時：平成２２年９月１２日（日）　１０：００～１５：００

講師：林　進（岐阜大学名誉教授・雑木林研究会会長）

概況

里山の生物多様性　人と自然との共生成果～多様な視点からの考案～

１　里山とは：里山は人が作った場所である。昔、里山にある森は、社会的財産であり、規範や節度があった（燃料に生木でなく枯木を取る等の約束事）。里山に住む者は貧しい生活をして山を守り、自分達の生活も守り、将来への持続を目的とした生活（伐採→植樹→再生という考え方）をしていた。これは、かつて、林業が人と森を結び付けていたことに関係する。日本では、山と森は同じ意味を持ち、「緑」というイメージがある。また、林業を営む森には必ず神社があり、樹を伐ったら、必ず植えるという作業が行われていた。これは、木には「神が宿る」と考えられており、その大切な木を伐った後、「植えた木を大切に育てる行為」を神に捧げるという発想があった。この「元の状態に戻す」という発想は日本人の心性である。

２　生物多様性の危機：里山では、人間の土地利用がもたらす「撹乱」条件に対応する生物相が形成されてきた。しかし、現在、人間が干渉しないことにより危機を迎えている。破壊しすぎてはいけないが、ある程度は手入れする必要がある。今まで問題は、森林の破壊や放置であったが、現在の問題は、里山や森など自然に対する人の「無関心さ」である。

３　里山に学ぶこと：短期間に変動させながら、長期間安定させる技術的、社会的システムのあり方や「循環・循環のサイクル」の原則等がある。よって、工業的な能率性が成立たない。「合自然原則」が最も合理性を持つ。変動しながら安定する生物界の

システムに学び、「多面性の価値」を求め、「一点集約型」の思考から抜け出ることが大切である。

４　今、改めて問う、人と里山との関係：　今、考えるべきことは、人と里山の両方が持続できる方法を探すことである。それを考えるには、里山の価値を見出す人の主観が大切である。自然に慣れ親しみ、人の主観を育てることが大切である。自分と自然との関わりを考え、暮らしの発想を考える。また、里山の多種多様な利用こそが「保全」の重要な契機となる。

５　日本、里山の風景：　里山は人が関わるからこそできた風景である。この、生産活動となる里山は、人の住む場所の中で「働く」風景である。つまり、里山というものは「用と美の世界」であり、「役立つものは美しい」という考え方である。これは、私たち日本人の森に対する意識をよく表している。